

## 【早期対象関係における‘皮膚’の体験】 (1968)

Ester Bick

〔原題: The Experience of the Skin in Early Object Relations〕

この小論文の中心的なテーマとは、赤ちゃん及びそのプライマル(一次的)な対象の‘皮膚’のプライマル(一次的)な機能についてであります。すなわちその皮膚とは、未だ身体から分化されているとは言えないパーソナリティを一つに纏めるところのプリミティブ(原初的)な‘繋げるもの binding together’であるというのがその趣旨です。【精神分析】は、転移 transference における依存 dependences と分離 separation の問題を専ら扱うわけですので、こうした事柄を巡って探究してゆくには極めて有利といえましょう。

ここでまず論じられるべき「テーゼ」とは、そのプリミティブな形態においてはパーソナリティの部分部分にはまったくのところそれらを‘繋げ合わせる力 binding force’が無いと感じられているということでありませぬ。従って、それらが一つの纏まりとしてしっかりと抱えられるためには、まずは受け身的にですが、境界(線) boundary としての‘皮膚’が機能することによって辛うじてそのように経験されることになるわけでありませぬ。しかしこうした自己の部分なるものをコンティンする内的機能といひますのは、まず最初にはそうした機能を施してくれていると体験されたところの外的対象が摂り入れられることに拠るといひませぬ。その後、この対象の機能との同一化 identification が未統合な状態に取って代わり、そして内なるスペース及び外なるスペースといった空想 fantasy が生じるわけなのです。そうであってこそ初めて、メラニー・クラインが述べているように、自己及び対象のプライマル(一次的)な分離及び理想化といった機能が作動し得るものといひませぬ。コンティンする機能 containing function が摂り込まれるまでは、自己の内なるスペースという概念は発生しようがありません。従って、内在化 introjection は、すなわち内なるスペースにおける‘対象のコンストラクション construction of an object’ということになりますが、損なわれたままであります。そうした内在化が機能不全でも、必然的に「投影同一化 projective identification」の機能は尚も引き続き持続してまいりますから、それに伴うあらゆるアイデンティティの混乱はよりいっそう顕著になるということになります。

こうした自己と対象のプライマルな分裂 splitting および理想化 idealization の段階は、自己と対象がそれぞれの‘皮膚’によってコンティンメントされる、そうした早期のプロセスに基づいているということが今や明らかとなったと見做してよろしいでしょう。

このプライマルな状態の変動は、乳幼児観察の事例においてさまざまに例証されております。まったくの無力 helplessness という受け身的経験としての未統合 unintegration もあれば、またその一方で発達上やむを得ない能動的な防衛が機能しての分裂プロセス splitting process ゆえの非統合 disintegration もあり、それら双方の違いも覗われませぬ。従って我々は経済原則からして、未統合

の状態における崩壊感 catastrophic anxiety へと導かれるところの状態を、より限定された具体的な迫害的 persecutory および抑うつ的 depressive な状態と比較しながら、考察してまいります。

未統合の状態 unintegrated state にあって、子どものコンティンしてくれる対象へのニーズは、死に物狂いともいえるような対象の探索へと子どもを駆り立てます。光、声、匂い、もしくは他の感覚的な何かといったそれらは、子どもの注意を捉えて離さず、そしてじっくり玩味されることで、少なくとも一時的にはバラバラなパーソナリティを一つに抱えてくれるといえましょう。その最適ともいえる対象は口の中の乳首でありまして、そしてそれと一緒に、抱っこし話し掛けてくれる、馴染みのある匂いを持つところの母親でありましょう。

さまざまな観察資料から、このコンティンしてくれる対象がどのように具体的に「皮膚」として体験されているかがご覧いただけるものと思われまます。このプライマル(一次的)な皮膚機能がうまく育っていないとしたら、それは事実上対象の適性 adequacy における何らかの欠陥か、もしくはそれへの空想的攻撃 fantasy attacks かのゆえであり、いずれにせよ摂り入れ introjection が損なわれているわけでありまます。プライマルな皮膚機能における障碍は、さらには「二次的皮膚 second-skin」機能の進展へと導かれることになり、そこでは対象への依存が「偽一自立性 pseudo-independence」に取って代わられるのでありまます。それは何らかのメンタルな機能の不適切な活用に拠るともいえまますし、もしくは生得の資質 innate talents かとも思われまますけれども、そこに皮膚のコンティンする機能の代替物 substitute をもうける意図が覗かれるのでありまます。そうした「二次的皮膚」形成の例として、これから観察資料を幾つかご紹介いたしまししょう。

尚、これらの所見を私はそれらの臨床的資料に基づいて得たわけですがけれども、この論文ではそうした典型例をごく僅かに示すに留めまました。今ここでの差しあたったの私の目的は、こうしたテーマをまずは提示することなのでありまして、より詳細は後の論文で論究してゆきたいと考えておりまます。

### **乳幼児観察: 赤ちゃんアリス**

未熟な若い母親とその最初の赤ちゃんが一年間をとおして観察されまました。赤ちゃんが生後12週間に至った頃、「皮膚コンティナー」の機能に徐々に進展が認められまました。母親は赤ちゃんとの親密な接触にも次第に慣れてき始め、それで赤ちゃんを活気づけるために敢えて興奮を煽るといった過剰な刺戟を与えることも減ってまいりまました。この結果として、赤ちゃんの不統合の状態が徐々に減じてゆくの観察されておりまます。それら不統合の状態とは、身を震わすなり、くしゃみをするなり、そしてチグハグな体の動きであったりというのがその特徴でした。そこに新しい住まいへの引越しという事態が起こったのです。その家はまだ完全には出来上がってはいまませんでした。それでこうした事態は母親の抱える能力に大いに支障を来たしまました。赤ちゃんへの興味が失せてしまつたのでありまます。彼女は日中テレビを眺めながら授乳をし始めまました。もしくは夜、暗闇の中で授乳しながらも赤ちゃんを全然抱え

ることをいたしません。赤ちゃんはさまざまな体調不良を呈し、そして不統合的な状態を益々募らせていきました。この時期、父親の病気がいっそう事態を悪化させます。母親はそのうち復職せざるを得ないと観念したということになります。そこで彼女は赤ちゃんに「偽一自立性」を促しました。トレーニング・カップで飲み物を与えたり、日中バウンサーに座らせっぱなしにしたり、その一方で夜間に彼女が泣いても頑として反応せず拒絶したのです。最初の頃、母親は赤ちゃんに攻撃的な表出を煽ることがあり、よくそのようにして子どもを煽ってはその結果に大いに気を良くしていたわけですが、今やそうした傾向に舞い戻ったのであります。そしてその揚げ句に、6ヵ月半頃にはアリスは、過剰に多動性の、攻撃的な幼い女の子となり、ひとの顔を拳骨で叩くという習癖を身に付け、それで母親は彼女を‘ボクサー’と呼び慣らしていました。ここに、「自己コンテインメント self-containment の筋骨たくましい muscular タイプ」の形成が覗われます。つまりは、真正の皮膚・コンテナの代替物としての‘二次的皮膚 second skin’ということになります。

### 精神分裂病の女児の分析;メアリー

メアリーの分析治療は彼女が3歳半のときに開始され、それ以降も何年かに亘って継続されました。そこから、メアリーの幼児期の成育歴にみられる発達障害に反映されているメンタルな状態を再構成することができたこととなります。事実は以下のものであります。難産であったこと、乳首をしっかりと啣え離そうとしなかったが吸う力は弱く、いつもだらだらしていたとのこと。3週目に哺乳瓶で補給されることがあったものの、母乳は11ヶ月まで続いたとのこと。幼児期の湿疹が4ヶ月目に出始め、血が滲み出るまで引っ掻くことがあったとのこと。母親にしがみつ、まとわり付いて離れなかったこと。お乳を待つ間ひどく焦れて苛立ったとのこと。発達は全般に遅滞が覗われますし、とても順当とは言えなかったということになります。

分析の最初の頃から、メアリーの分離 separation への抵抗感はかなり顕著でありました。最初の休暇明けのセッション以降から、あごをくいしばり、手当たり次第にモノを壊し、破るやら切り裂くことが常態化しました。直接肌を執拗にくっつけてこようとするとといった具合に、その依存性は際立って顕著でありました。そうした依存性は、彼女のグニャグニャの真っ直ぐではない姿勢やらチグハグといってもいい動作性などの不統合な状態において明らかに覗えますし、またその一方で、モノごとについて考えたりコミュニケーションする能力についても然りでありまして、モゴモゴと曖昧でさっぱり要領を得ず、それが毎回のセッションの始まりにおいて顕著であり、徐々にセッション中に進展が見られ、セッションを去る時点ではまた同じような状態に戻るといった具合でした。彼女は背を丸め、なんともギクシャクした恰好で歩いてやってきましたが、それは後に彼女自らが「ジャガイモの麻袋」と呼んだように実にグロテスクな印象でありました。〈オハヨウ、Mrs. ビック(Good morning, Mrs.Bick)・・・〉と言う代わりに、〈SSBICK〉と破裂音を発します。この「ジャガイモの麻袋」は、その中身を落としてしまう危険性が絶えずあるもののように覗われました。それは部分的に、彼女がしょっちゅう皮膚に爪を立て引っ掻き傷をつくっていたせいだからです。つまりは、彼女の部分ともいえる‘ジャガイモ’の入っている(投影同一

化)ところの対象の‘袋 sack’・皮膚が表徴されていたわけなのです。やがてメアリーの際立った依存性も全般に亘って減じてまいりまして、それと並行して背を丸めた恰好から直立の姿勢となってゆきました。だが、そうした進歩は、コンティンしてくれる対象との同一化をとおしてというよりも、むしろ彼女の筋骨のたくましさ muscularity に基づいた‘二次的皮膚’の形成をとおしてであったと考えられます。

### 成人の神経症の患者の分析

分析の転移において接触 contact がどのようなクオリティを呈するか、そして分離がどのように体験されているかといった観点から吟味してみますと、そこには‘リンゴの麻袋 sack of apples’そして‘カバ hippopotamus’といった類いの、自己を体験する異なった2つのタイプが交互に現われるさまが考察されたわけであります。いずれもが授乳期に何らかの妨げがあったことに関連しているものと思われる。‘リンゴの麻袋’の状態では、分析患者はとて神經過敏で扱いにくく、それにとて空疎であります。絶えず注目されたり褒められたりを求めますし、簡単に打ち身をつけ痣だらけで、しょっちゅう事故に遭いやすいわけなのです。例えば、寝椅子から起き上がる時に躓いてこけるといった具合に…。そして‘カバ’的状況では、例えば別の、成人の男性患者の例ですと、彼は攻撃的で、暴君になります。誰に対しても仮借のない痛烈な物言いをしますし、冷酷非情に自分のやりたい放題をやろうとします。いずれも‘二次的皮膚’の構造様式と見做していいわけでした、投影同一化が支配的であります。この‘カバ’的皮膚は、‘麻袋’にも似て、彼自身が内に抱える対象の‘皮膚’を反映しております。すなわち、彼はそうした対象の内側に存在しているといったわけなのです。その一方で、(メアリーの症例にもあったように)薄い皮膚で、ごく簡単に傷だらけになるといった、麻袋の中のリンゴとは、この無感覚 insensitive な対象の中にある自己の部分の状態をそれ自身表しているものといえましょう。

### 子どもの分析; ジル

彼女は5歳の子どもで、かつて授乳時に‘拒食症 anorexia’とも特徴付けられる問題を抱えていたわけですが、その分析の早期において「皮膚/コンティナー skin-container の問題」が提示されたのであります。最初の分析の休暇中のことでしたが、彼女は母親に付き纏い、頻りにあれこれ要求することをいたしました。またこの時期、彼女は着衣する折にからだをしっかりときつく締め付け、靴の紐をもきつく縛るといったことをしております。この後の資料から判明したのですが、彼女はどうやら強烈な不安感を抱いており、彼女自身は断然玩具やら人形とは違うということを主張し、是が非でも区別しなければ気がすまないといった感じなのでした。それについて彼女が言いましたのは、<オモチャはわたしみたいじゃないでしょ。壊れちゃうし、一度バラバラに壊れたら、それでおしまい、また良くなったりはしないし。オモチャは皮膚を持っていないでしょ。われわれには皮膚があるわ！(Toys are not like me, they break to pieces and don't get well. They don't have a skin. We have a skin!)>ということでありました。

## 総括

このように、その分析的な再構成をとおして見ますと、一次的皮膚形成 first-skin formation に障  
碍のある患者のすべてに、その授乳期にかなり深刻な問題があったことが指摘されます。必ずしも両  
親にそれが観察されていたとは限りませんが・・。この欠陥のある皮膚形成 faulty skin-formation は  
後に統合面においても組織上においても概して脆弱性をもたらすことになるわけであり、それは不  
統合性の状態をそれ自身表しており、退行とは自ずと異なるものでありまして、そこにはごく基本的な  
タイプの、部分的もしくは全体的な不統合性が、その身体、姿勢、運動性、そしてそれに関わるとこ  
ろの心的機能において、殊にコミュニケーションであります、内在されているといえましょう。このように、  
「二次的皮膚」現象とは、‘一次的皮膚の統合 first skin integration’ に取って代わるものであり、  
‘筋骨たくましい殻 muscular shell’ の部分的もしくは全体的タイプとして、もしくはそれに対応するとこ  
ろの‘言語的な筋骨のたくましさ verbal muscularity’ として現れているものといえましょう。

「二次的皮膚現象 second skin phenomenon」についての分析的な探究は、一時的に不統合の  
状態をもたらす傾向があります。母親の対象へのプライマルな依存性についての徹底的なワークスル  
ー(徹底操作)を粘り強く推し進めるといった分析でしかこの潜在している脆弱性に挺入れすることは  
不可能であります。そして分析的な状況をコンティンするには、殊にセッティングが極めて重要でありま  
す。従って、テクニクのゆるぎない厳格さ firmness が必須条件であるといった面がここで殊更に強調  
されねばならないということになりましょう。

\*\*\*\*\*

※原典; The experience of the Skin in Early Object Relations  
by Ester Bick  
International Journal of Psychoanalysis, (1968),  
vol. 49, pp. 484—86

尚、この論文は下記の出版物に再録されております。

《The Tavistock Model—Papers on child development and  
psychoanalytic training  
by Martha Harris and Ester Bick、  
edited by Meg Harris Williams, Karnac 1987》

《Surviving Space —Papers on Infant Observation;  
Essays on the centenary of Ester Bick 》  
edited by Andrew Briggs, Karnac 2002

\*\*\*\*\*